

## ケアとモラロジー

### 「ケアとモラロジー」共同研究プロジェクト

※本稿は令和三年九月二十五日にオンラインで開催された道徳科学研究フォーラム「ケアとモラロジー」の基調報告とシンポジウムにおける報告の内容をまとめたものです。

はじめに

—「ケアとモラロジー」共同研究プロジェクトについて—

「ケアとモラロジー」の共同研究会は二〇一八年の十月に道徳科研の中にできまして現在に至っています。毎月一回集まって研究会を続けてきました。これまでモラロジーの研究・学習の中でもケアについていろいろと論じられてきておりまして、特に水野治太郎先生を中心にケアということがいろいろに語られてまいりました。そうした先行研究を継承してさらに発展させたいというのが、この共同研究の試みということになります。

また、この共同研究ではケアを中心テーマとするモラロジーの学びのコンテンツを作ろうということを目指して進めてきています。今回はそのキックオフに当たるような、そういう学びのコンテンツの一つとしてスタートが切ればと考えています。それから、この共同研究をやっている中で、そもそもモラロジーをどう学んでいくのかということも別途の課題として浮かび上がってきました。そこでモラロジーの新たな学び方の検討ということも進めています。

次に共同研究のメンバーを紹介させていただきます。現在お話しさせていただいているのが宮下です。道科研で副所長をさせていただいております。また、麗澤大学で准教授として奉職させていただいております。麗澤大学では道徳科学の授業等をもう十年以上担当させていただいております。学生たちと触

れ合うなかで、学生たちが次のような想い、人の役に立つために何かをしたい、そういうことこそ自分にとって価値がある、というような想いを抱く学生が少なくないことに気づかされています。これは非常に広い意味でいうと、皆さんとも共有できるような考え方かなと思うのですが、そうした学生たちの想いと道徳科学、特に今回のケアということは非常につながりがあるように私は感じています。

メンバー紹介を続けます。次は宗中正さんです。道科研の副所長、道科研教授です。宗さんは、長らくモラロジー専攻塾に関わってきて、モラロジーを学ぶ青年の教育にずっと携わってきていらつしゃいます。その中でどういふふうにもラロジーを学んでいくのか、学ぶことができるのか、つまり、モラロジーの教育というところが宗さんの中心のテーマとしてありまして、今回の共同研究でもいろいろな発言をいただいています。宗さんは「人間の尊重」とか「人間の尊厳」ということを最近の中心的なテーマとして語っていらつしゃいますので、この後のシンポジウムの中ではそういうお話があるんじゃないのかなというふうに期待をしています。

続きまして中地孝博さんです。中地さんは、柏の廣池学園の中にある高齢者介護事業所「麗しの杜」の館長をされています。現在、私の子どもも麗しの杜の中にある託児所にお世話になっておりますし、私の妻方のおばあちゃんも、こちらの麗し

の杜でお世話になったりしています。実際にケアということに非常に密接に関わるお仕事をされていて、また同僚、あるいは部下として周りにいらつしゃる、一緒に仕事をされてる方々も、ケアと非常に深い関係のある仕事をなさっています。そういう中で、いろいろなお話がまた聞けるといふふうにも期待をしています。

次に木下城康さんです。木下さんは道科研の主任研究員です。ライフ・デザインとかキャリア・カウンセリングという辺りに専門領域があり、広い意味でいえばモラロジーも含めて「人生の意味というのは何なのか」ということを、ずっと丹念に追究をして研究をされています。生きがいとは何なのか、働きたいとは何なのか、人生の意味とは何なのか。こういうようなテーマを基に、いろいろな研究をされています。現在は、モラロジー道徳教育財団内の家庭教育課とも深く関わって、いろいろなことをなさっています。

続いて竹内啓二先生です。竹内先生は道科研の客員教授で、麗澤大学で長年にわたって教鞭を執られていた先生です。竹内先生は、水野治太郎先生とともに「生と死を考える会」でずっと活動されてきていて、「東葛生と死を考える会」で中心のメンバーとして活躍されています。それ以外にも、先生は毎朝早起きして近隣の公園でいろいろな方々と関わり合いながら、いろいろな活動をされているような、そういうエネルギーシユ

な先生です。今日はご自身の経験も踏まえたお話を聞かせていただけるんじゃないかと期待しています。

最後に、今回のフォーラムを準備する上で、かなり幅広い範囲でご活躍いただいているのが楠仲次さんで、道科研の事務長です。楠さんには共同研究のキックオフの時点から毎月ずつご参加いただいて、いろいろとご尽力をいただいています。どうしても研究者だけだと、こうした会はなかなか実現・継続しないんですが、楠さんの強力なけん引力の中、こういう研究会が持てたことを非常にありがたく思っていますし、感謝しています。楠さんはこれまで地方のモラロジー活動などで、豊富なご経験を積まれてきていますので、楠さんの話も常に参考にさせていただきながら、ここまで進めてきました。

以上、前置きが少し長くなりましたが、ケアとモラロジーの共同研究について簡単にご説明させていただきました。

〔ケアとモラロジー〕共同研究プロジェクトリーダー 宮下和太

## 【基調報告】

## なぜ〈ケアとモラロジー〉なのか

宮下 和太（道徳科学研究所主任研究員）

## はじめに

最初に私のほうから四〇分間、この共同研究で考えてきたこと／考えていることを、少し大きな形で提示をさせていただいて、それから先に進めていこうということで基調発表の時間を設けています。「なぜケアとモラロジーなのか」ということがテーマです。時間が限られていますので、お伝えしたいことの結論に当たるような部分を、あらかじめ揭示をさせていただいています。

なぜケアとモラロジーなのか。なぜケアとモラロジーを関係づけて、こういう形で研究をするのか、語るのか。それは、モラロジー・最高道徳が提唱・追求してきたことが、現代の学術・社会の中では「ケア」の概念として提唱・追求されているというふうに考えられるからです。これが私たちの共同研究が持つている一つの観点です。そのため、ケアについて理解を

深めることが、最高道徳の理解を深めることにつながり、また、それは最高道徳実践の端緒にもなる。ケアについての理解ということが、最高道徳の実践とも、非常に密接につながっているのではないかというのが二つ目の観点です。その上で三つ目にいくわけですが、ケア「と」モラロジーという形で、この二つを関連づけて学ぶことが、これからの道徳というものを、モラロジアンだけでなく幅広い人々と共に考えていく上では、極めて重要なポイントになるのではないかとということが、「なぜケアとモラロジーなのか」というところで私たちが考えている基本的なラインということになります。

それでは「ケア」ということについて少しお話をさせていただきたいというふうに思うのですが、今回は「モラロジーを通じてケアということを考える」、それは「ケアということを通じてモラロジーを考える」ということにもなるわけですが、以下の三点のことをお伝えしたいと思います。

- ① ケアは「品性完成」のプロセス
- ② ケアは「人心救済」のこと
- ③ ケアの倫理は「正義」と「慈悲」を課題にしている

カッコ内はモラロジーあるいは『道徳科学の論文』の中で語られているものですが、一点目は、ケアは「品性完成」のプロセスであるということ。二点目は、ケアは「人心救済」のこと。これはもしかしたら少し言い過ぎているかもしれませんが

が、伝わりやすいメッセージとして。そして三点目、ケアの倫理は「正義」と「慈悲」を課題にしているということ。この三点が、ケアとモラロジーの大きな接点として、すでに浮かび上がっているものです。以下では、この三点についてを中心にお話をさせていただきます。

#### 一、「ケア」という言葉とその経緯

それに先立って「ケア」とは何かということ、少し「ケア」という言葉、振り返って見ていきます。先ほど犬飼所長のあいさつの中でもありましたが、英語の care とか caring という言葉は、日本語に翻訳するときいろいろな訳語がつかまします。「配慮」とか「気遣い」とか「世話」「思いやり」など、日本語にすると意味が細かく分かれていて「ケア」という言葉が持っている全体がうまくつかみづらいような言葉と言えるのかなと思います。ただ、その「ケア」という言葉は、現在私たちの生活の中では、かなり日常的に用いられるようになってきているのも事実です。

例えば、「ケア」と聞いてどういうことを思い浮かべるのかで考えてみますと、第一にやっぱり「デイケア」とか「ケアマネジャー」「ケアワーカー」というような言葉が浮かぶのではないかと思います。それから「ターミナルケア」「緩和ケア」「グリーンケア」などでしょうか。だいたいカタカナ語と

いうのは、なんだか漠然としたイメージになりやすいものですけれども、確かにこういう言葉が盛んに用いられてきています。もっと視点を変えますと、「スキンケア」とか「ヘアケア」「ヘルスケア」など、テレビコマーシャルなどでよく聞くような、そういう「ケア」が付いた言葉もあります。それから「アフターケア」、さらには「メンタルケア」もあります。こうした形で「ケア」という言葉は、先ほどの英語の訳に当たっているような部分をほうふつさせながら、いろいろな形で使われています。さらには、最近では「ヤングケアラー」というような言葉も聞くようになりました。「ヤングケアラー」というのは、例えばまだ年若い子どもなのに、親があまり面倒を見てくれないために自分で食事や洗濯をしたり、あるいは妹や弟の面倒を見なくてはいけない。そういう形で、自分自身の家族やきょうだいを「世話」して、「気遣」って、「思いや」らざるを得ないというような、ちよつと否定的な意味で使われている言葉ではありません。例えばモラロジーの創設者である廣池千九郎博士が、青年教師時代に子守学校をつくらうとしたり、夜間学校をつくらうとしたのは、まさにこうした「ヤングケアラー」に何とか教育の機会を与えようとして実践されてきたということもできます。

では、そもそもこのように現在様々に使われている「ケア」という言葉ですが、最初のところでは、「キュア (cure)」に対

する「ケア (care)」という形で提起されている面が非常に大きかったのではないかと思います。「キュア」は「治療」であり、医療ということであろうと「ケア」は「看護」というような形に当たるとは思いますが、これらはどちらも人間にとつて非常に大切なことであります。「治療」をする上では、やはり冷静かつ理性的な態度でしっかりと治療に臨まなくてはいけないわけですが、一方で、それに対する「ケア」には、温かく人間的に包んで、全人格的に相手に寄り添って臨んでいくような、そういう態度が示されているわけです。この二つの態度の対比ということが、「キュア」に対する「ケア」という形で、「ケア」概念に非常に分かりやすいイメージを与えてくれると思います。ただし「ターミナルケア」「緩和ケア」とも言われるように、「キュア」の世界と「ケア」の世界はどちらか片方だけではうまくいかない。これら両方が伴って進んでいくことが大切であるということは、広く共有されつつあると思います。さらに、これをモラロジーの言葉で言うならば、私はこれこそ「知徳一体」あるいは「情理円満」つまり感情と理性が円満に調和することであり、廣池千九郎博士が晩年に強く主張されていた道徳科学・最高道徳のポイントとも通じ合うような視点とも言えるのではないかと考えています。

では「ケア」という言葉は、そもそもなぜ現在これほど多様に使われるようになっていったのかという原点を探っていきま

すと、ケア論の原点としてミルトン・メイヤロフ（一九二五—一九七九）の『ケアの本質』（原題 *On Caring*, 1971。邦訳は一九八七年、ゆみる出版）という本の出版が非常に大きな影響を与えています。この小さな本が起点となって「ケア」ということが盛んに語られるようになっていったわけです。共同研究でもこの本をみんなで読んでいったんですけれども、同書が現在どのように認知されているかを幾つかの先行論文から挙げますと、「ケアリング」という語を初めて用いた哲学者<sup>①</sup>が、このミルトン・メイヤロフの『ケアの本質』であり、「ケアリング研究の先駆者」であり、「ケアについて本格的に取り上げた最初の人」である、と。医療・看護系の大学などでは、このメイヤロフの『ケアの本質』は、今でもロングセラーという形で、教科書のようにして読み継がれているというこのようです。原書が一九七一年、邦訳が一九八七年ということですから、まだ半世紀も経たないような状況ということですから、しかし、これ以降、「ケア」という言葉が、ここまであふれるように展開をしています。

## 二、ケアとモラロジー

### ① ケアは「品性完成」のプロセス

それでは、ようやくケアとモラロジーについての本発表の第一のメッセージのところに入っていきたいと思えます。ミルト

ン・メイヤロフは『ケアの本質』の中で、「ケア」という言葉を端的に一言で表しています。それは非常に重要なメッセージとしてよく引用される箇所なのですが、こういうふうに「ケア」のことを語っています。

一人の人格をケアするとは、最も深い意味で、その人が成長すること、自己実現することをたすけることである。

（『ケアの本質』一三頁）

私は自分自身を実現するために相手の成長をたすけようと試みるのではなく、相手の成長をたすけること、そのことによつてこそ私は自分自身を実現するのである。（同、七〇頁）

ケア論の原点であるメイヤロフは「ケア」について、まず「二人の人格をケアする」というふうに挙げて、それはその人の成長、自己実現を助けるということがケアなんだという形で、ケアについての説明を与えています。さらには「相手の成長を助けること、そのことによつてこそ私は自分自身を実現する」と述べています。この二つのところを最初に読んだ時には強く感銘を受けたわけですが、それはなぜかといいますと、ここでメイヤロフが言っていることは結局、最高道德の

格言にある「人心を開発して品性を完成す」ということ、言い換えると、他者の人心を開発することで、自分の品性が完成され、自分の品性を完成していくために、人心の開発をしていく、という道徳科学・モラロジーの実践が含んでいる非常に重要な部分である「人心の開発」と「品性の完成」ということを、「ケア」という言葉を通して言い換えているように私には感じられたからです。また、特に「相手の成長を助けることによつて、自分自身を実現する」こと、つまり相手の成長を助けたことの結果として自己の品性が完成されるという、そういう位置づけも、「自分自身を実現するために相手の成長をたすけようと試みる」と捉えられやすかった道徳科学の中では非常に重要なメッセージを持っていると感じます。一方で、その人の成長や自己実現のためには、何もただただ甘やかしたりするだけではありません。「かわいい子には旅をさせよ」という言葉がありますが、かわいいからこそ自分自身が自己実現をしていくように、育つように、厳しく、こちらからの手を少しとどめて、相手が自分で伸びていくのをじっと見守っていくような、そういうものも「ケア」ということのうちに含まれているのかなというふうに感じるわけです。

「ケア」ということが、相手にとつての品性完成のプロセスとも言えますし、また自分にとつての品性完成のプロセスというふうにも言い換えることができるのかなというのが、一点目

ということになります。

## ② ケアは「人心救済」のこと

次に二点目のメッセージです。「ケアは人心救済のこと」というふうに表現させていただきました。これは、まだ私の中でも少し表現として迷うところがあるのですが、ひとまずこのように表現させていただきます。水野治太郎先生が『弱さにふれる教育』という本の中で、「ケア」ということをこういう形で定義をされています。

ケアとは、人間と人間の平等な関わりの中かで実現される、密度の高い体感的な相互共鳴のいのちの作用である。人は他者へのケアを通じて癒し癒されるとともに、人間理解へと導かれ、成熟を遂げることができる（水野治太郎『弱さにふれる教育』ゆみる出版、一九九六年、一一二～一一三頁）

ちよつと難しい言葉ではあるかと思いますが、水野先生に確認したところ、ここで述べられたものがご自身としては一番びつたりしているとお伺いしています。「人は他者へのケアを通じて癒し癒されるとともに、人間理解へと導かれ、成熟を遂げることができる」、水野先生らしいなと感じる部分は、ここで「成熟」という言葉を述べられている部分です。メイヤロフは

人の「成長」を助けるという形でいいましたけども、世の中には成長ということが不可能な場合というものもいろいろ出てきます。もうこれ以上成長することはできない、成長を助けるということはできないかもしれない。だけれども、たとえ成長が不可能な場合でも、その人の「成熟」、あるいは自分の「成熟」ということは、まだまだ追究して遂げることができるのではないのか。成熟という言葉の水野先生がこうした形で用いられているところにはかなり深み、含みがあつて述べられているのではないのかというふうに考えられるわけです。

このことから、少し話がまた別のところにいりますが、廣池千九郎記念館の副館長の矢野篤講師が、令和三年四月の廣池千九郎記念館講話で述べられた中に出てきた内容なのですが、私には非常に響くものがありました。ご関心のある方は、モラロジーの維持会員の方であれば維持員ネットの中で視聴いただけますので、またご覧いただければと思いますが、矢野講師の話の中、こういう話が出てきています。林カツ子という人についてのエピソードです。大正十三年、『道徳科学の論文』を執筆中の博士のもとに、十七歳の結核の娘である林カツ子さんを預かってほしいという、そういう依頼がきます。博士は結局、その十七歳の結核の娘である林カツ子さんを預かって「ケア」をされています。およそ半年ぐらいの期間、そのような形で博士が近くで「世話」をして「面倒」を見てというような形になり

ます。残念ながら、同じ年の十二月二十一日に林カツ子さんはお亡くなりになっています。こうした経緯のなかで、亡くなるちよほど一カ月ぐらい前の十一月十九日に林カツ子さんから廣池博士に宛てた手紙が残されています。おそらく廣池博士がどこか講演等で外出されて、いなかったときに廣池博士に手紙を書いているかどうかと勧められて林カツ子さんが書かれたものだろうということだと思います。その手紙の中で林カツ子さんがこういうことを書かれています。亡くなる一カ月前です。

其後お蔭様にてすこしも痛みはせず、夜もよく休まれるやうになりました。これ全く神様のお蔭と心から感謝致して居ります。(中略)私もこれからは一心に神様におすがりして、どうしても人様を助けさしていただく心になります。右の次第にてどうか御安心下さいませ

こういう手紙を廣池千九郎博士宛てに林カツ子さんが書いてます。先ほども述べたように、残念ながら林カツ子さん、この一カ月後の十二月二十一日にお亡くなりになるんですけれども、この博士宛ての手紙が入っていた封筒が残ってまして、その封筒の裏面に、博士の直筆で「林カツ子ノ助カリシ事」っていうふうに書かれていた、というのが矢野講師の話です。私はこの話を聞いて、本当に衝撃を受けたわけです。なぜ衝撃を受けた

のかというと、先ほどの話と少しつながって来るんですけども、人間が成長するということにはどうしても限界があります。だけれども、人間が成熟していくことに関してはまだまだ先があるわけです。博士が人心開発救済の一環として、林カツ子さんをお助けしようとしているのとケアをされて、その結果、林カツ子さんは亡くなってしまっているんだけど、しかし博士は「林カツ子が助かった」と捉えているではないか、と。ここに人心開発・救済とは何かという大きなヒントがあるのではないかと、と衝撃を受けながら講義を聴講したわけです。ここにはまさに水野治太郎先生が言っているような「成熟」へと向かう道が一つ示されているような気がしたのです。モラロジーで考える人心開発救済を、われわれが今ケアと関連づけて考えた場合に、こうした視点が博士のエピソードから見えてくるのではないのかと思います、この話を少し紹介させていただきます。

③ ケアの倫理は「正義」と「慈悲」を課題にしている

次に三点目「ケアの倫理は「正義」と「慈悲」を課題にしている」についてです。ケアということがメイヤロフから提唱される、いろいろな人々がケアに関心を持って進めていくようになる中で、「ケアの倫理」と呼ばれるものが、キャロル・ギリガンという女性の道徳研究者から提起をされます。このケアの倫

理ということと、モラロジーで述べている「正義」と「慈悲」ということは、非常にパラレルな、密接な、似たような関係性を持ったものとして私は受け止めています。ケアの倫理そのものについての説明は別途で時間を設けないと、指定の時間内ではなかなか厳しいのかなというふうに思うのですが、簡単に一言でいってしまうと「何が正しいかではなく、どのように感じるか」ということを考えるのがケアの倫理です。これまでの道徳は何が正しいのかということを中心にして道徳を考えてきたけれども、そうではなくて、目の前にある現実にとどのように応じるのかということを考える道徳・倫理が「ケアの倫理」であり、それが「正義の倫理」とは別に、非常に重要なものとしてわれわれの世界には存在しているのではないのか、ということとを述べています。ケアの倫理で訴えているのは次のような内容になります。まず「非暴力的に葛藤を解決していく」という基本信条」があることです。何が正しいかをベースにして葛藤が生じた場合、それを解決しようとする、時として暴力的になることがあります。つまり、正しいんだから、正しくないものと争って正しさを認めさせていくのだ、と。暴力的であっても正しいんだから認めさせていく、というようなあり方が「正義の倫理」からは導かれやすい。これに対して非暴力的に目の前で起こってる葛藤を解決していくというものが「ケアの倫理」の基本信条です。次に「ケアをすることによって、人間関係を

修復させることができる」「ケアが、人間関係を修復させる原動力になるんだ」という信念を持つこと。これによって、様々なジレンマの問題、その問題に登場する人物たちを、お互いに権利争いをしていて敵対者として見るのではなく、お互いが依存し合っている人間関係のネットワークのメンバーとして見ていく。これが「ケアの倫理」が訴えていることであり、「正義の倫理」を超えて「ケアの倫理」へということと、現在広く提唱され、広がりつつある倫理ということになります。

なぜ廣池博士が大正年間に労働問題の平和的な解決に向けてさまざまなご尽力をされたのか。そこには資本家と労働者が権利争いをして敵対するのではなく、お互いが相互依存し合っている人間関係のネットワークの中のメンバーとして、非暴力的に解決していくとしたからこそ、「ケア」ということが重要になってくる。博士の言葉でいえば、正義に対して「慈悲」ということが重要になってくる。こういうメッセージになるのかなと思うわけです。この点も、ケアとモラロジーの非常に大きな接点と考えています。『道徳科学の論文』では、正義の限界ということ、特に人間的な正義の限界ということを、さまざまに述べています。因襲的道德をめぐる箇所では端的に「正義的道德」（第四冊、一九七頁）という形で触れられています。これに続く「破邪的道德」の項には、自ら正義を守るのはいいかれども、自分の心を標準にして他の不正、つまり正しくないも

のを打つというときには、自分の心は平和じゃないし、自分の健康や寿命も害するし、また他人からは恨まれるし、当然ながら争いの源になっていくことも述べています。だからこそ「自然に自分の感化を他の人に移すのが自他の幸福を致すゆえんであって、これが真の道徳でありましょう」と論じたわけです。こうした部分に、先ほどのキャロル・ギリガンが言う「ケアの倫理」との接点が少し見えてくるということになります。そもそも「道徳」という視点そのものがこういうような意味を持っています。法律ではなくなぜ道徳なのかということ、つまり、強制・強要ではなく、自分自身が気付いて自発的に進んでいくようなところが「道徳」ということの本来の意味とも非常につながりあう部分ですから、こうした点を「正義的道徳」の限界として博士は批判されていたわけです。

他方で、そうはいうものの、正義に対比される「温かい慈悲の心」というものは、廣池博士の中でもそれを実現して身に付けていくのはなかなか大変な過程であったということは廣池博士の日記を見ているとよく分かります。例えば大正九年五月四日の日記（『廣池千九郎日記』第二冊、二四七頁）には次のようにあります。

一、温かい慈悲の心にて、一視同仁に何人何事にも接すること。

二、従来、右の心使いをするはずになって居りしも、先方のやり方があまりに不正なる時には真に温かき心使えず。

一つ目として温かい慈悲の心で何人にも何事にも接するんだと自ら誓いを立てられているわけですが、モラロジーを学ぶわれわれにとつて重要なことは二のほうでしょう。従来、「右の心遣い」つまり温かい慈悲の心を持って、誰に対しても何事にも取り組むんだというふうに自分で考えているはずなんだけれども、先方のやり方があまりに正しくないときには、どうしても本当の意味での温かい心が使えないんだと自己分析しているわけです。「正義的道徳」から、「正義の基礎に立つ慈悲」という形で、慈悲の心のほうへと廣池博士自身の道徳の追究が進んでいったわけですけども、それはなかなか難しいものでもあり、私としては、だからこそ取り組むだけの甲斐があるものなのか、と考えさせられるわけです。

### 三、ケアと公共性、人心開発と公共性

その上でもう一点、この「ケアの倫理」ということについては後ほど竹内先生のところで詳しくお話しいただくことになるかと思いますが、ケアの倫理と公共性ということも併せて考えていく必要があります。

以前、ケアのことを研究されている第一線の研究者である品

川哲彦先生を道徳科学研究所の研究会にお招きして、「ケア関係の構造分析」というご講演をいただいたことがあります（内容は『モラロジー研究』七八号、二〇一六年に収録）。その中でケアの関係について、こういうことを述べられています。ケアについてのは、「誰もが他人から応答してもらえ、仲間に入れられ、誰一人として取り残されたり傷つけられたりはしない世界」を追求するのがケアなのだ、と。これは確かに、大変望ましく非常に理想的な状況だなということはご理解いただけるかと思いますが、一方でそんなことは可能なのだろうかということも思われるかもしれません。私はいま、柏のこの地において、私が目の届く範囲、耳にできる範囲、手で触れる範囲というのは限りがあります。その限界を超えたところはどうするのだということが、ここで一つの課題になってくるわけですけども、それに対して品川先生はこういうふうにおっしゃっています。「ケアする者がケアしうる範囲には限界があることを承知しつつ、ある者がケアできない範囲は別の者がケアする、という仕方です。ケアする／ケアされるという関係のネットワークのなかにすべてのひとを編み込んでいく」のだ、と。これがケアの倫理が目指している世界なのだ、と。つまり、ケアというと、どうしても目の前にいる存在、例えば自分の子どもであったり、自分の親であったり、あるいはもっと広げて自分の職場であったり、いろいろあるかと思うんですが、「ケア」というと、やはり身

近な対象に向き合うということが中心として考えられるわけです。ただ、その身近な対象に向き合いつつ、全体としてケア関係を結ぶ自分と相手のあり方が世界的に広がっていけば、それで全体を包括するんだ、というわけです。これが「ケアの倫理」が考えている「公共性」ということになります。

ではモラロジー・最高道徳ではどうか、ということですが。この点においても「ケアの倫理」と最高道徳には重要な接点があるというのが私が考えていることであり、共同研究の中でもいろいろにお伝えしようとしてきたところでもあります。

ここで「事業誠を尽くし救済を念となす」という格言についての説明を見ていきたいと思えます。

最高道徳においては、自分の家業もしくは職務は、神の力を助けて人類全体の便利と利益を増して、これを満足させることを主となし、しこうして自分の精神はすべて日常生活の接触する人々の精神を最高道徳的に開発しようとして、自己を益するということよりは、むしろ自分の家業もしくは職務は、人心を開発しもしくは救済する一つの公設機関であるように考えて、その職務を行い、もしくはその家業を勉勵したならば、その徳の増加とともに社会の信用大いに加わりて、必ず幸福の身となり得るのであ

ります。『道徳科学の論文』第九冊目、三八〇頁。※傍線は発表者による)

傍線のところ注目をしていただきたいのですけども、最高道徳あるいはモラロジーの実践ということを考えて場合に、「すべて日常自分の接触する人々の精神を最高道徳的に開発」する。これを「ケア」ということで考えたならば、日常自分の接触する人々の精神を成熟させる、育てる、助ける、そういうことが最高道徳的な開発ということとつながっています。更にそうした取り組みを、人心を開発し、もしくは救済する一つの「公設機関」、それはつまり公の、公共的な事業に従事・参画するのだという大きな理念をもって進めていくものといえます。自分の身の回りに接する人々を対象としながらも、公設機関つまり全体を包括するような公共的な意識に基づいて取り組む。これら二つのが重なるような形で、ようやく最高道徳と呼ばれる世界が開けてくるのではないのかと考えられるわけです。

#### おわりに

ケアとモラロジーを関連づけて、われわれの共同研究ではずつと考えてきました。このことが、これからの道徳ということ

ということが、「なぜケアとモラロジーなのか」というテーマの中心にあります。この部分を共有して、また全体討論の時にご意見をお聞かせいただければと思っています。ご清聴いただき、どうもありがとうございました。

## 【シンポジウム報告①】

## 概念、内容、能力

— 方法論の視点から —

木下 城康（道徳科学研究所主任研究員）

一、招待状——一緒に考えていきませんか？

皆さま、こんにちは。木下城康と申します。宮下さんに紹介していただきましたように、私は、キャリア支援のほうでやらせていただいています。先ほどご質問がありましたのが、その視点、面白いですよ。ケアにはプロがいるんですよ。一方で、モラロジ-にプロっていないですよ。このところが、今回の一つのキーになるかなと思っっているんです。私は、キャリア支援者、いわゆるプロを養成するところにおりまして、国家資格キャリアコンサルタントの資格更新講習や、あるいはこれから国家資格を取ろうとする人たちに、どのような基準で、キャリアの転機にある人たちをケアしていくことができるのかということを指導といたしますか、講義をさせてもらったり、実践的なセミナーを開かせていただいたり、そういう視点から関わらせていただいています。

今日の私の発表の趣旨というのは「招待状」なんです。どういうことかといいますと、このケアとモラロジ-の研究会は、今まで三年間、月に一回やってきて、今回のこの研究フォーラムを期にオープンにして、このケアとモラロジ-について一緒に考えていきたいという方がいらっしゃるようであれば一緒に考えていきませんか、ということをご提案させていただく、ということなんです。それが私の発表の主旨です。この後、具体的な日取りなどが紹介されると思うんですけども、オープンにする会を設定していきますので、今日の会に参加していただいた上で、さらにもう少し学びたいと思っただいた方がいらっしゃれば、ぜひ一緒に考えていければいいと思っっています。そういう意味で今日は「招待状」を皆様にお送りしたいというのが、私の一番言いたいことなんです。

二、ケアとモラロジ-を共に考えること——視野が広がる

では、このケアとモラロジ-の研究会で何を学ぶことができるのかということになると、私からは「概念、内容、能力」の三つを提案します。

- (1) 概念レベル ケアと人心救済について
- (2) 内容レベル ケアや人心救済とは何で構成されているか
- (3) 能力レベル どのように関わるか

この三つの視点から考えることができるようになるわけですね。つまり、ケアとモラロジーを共に考えることで、まず視野が広がるということをはじめに申し上げておきたいなと思います。次に、どのように視野が広がるのですかということになりますと、「概念、内容、能力」の三つのレベルでケアとモラロジーについて考えていくことができるようになりますということ、申し上げます。

整理するためにこれまでの経緯を簡単に振り返りますね。この三年間、研究会をやっている中で、それぞれのレベルでこの議論がされてきたかなというふうに感じているところがあるんですね。まず「概念」レベルでケアと人心救済について議論してきました。これは「ケアとは何か。モラロジーの人心救済とは何なのか」ということに焦点を当てて検討してきた、ということなんです。あるいはコンテンツなど、「内容」レベルでケアや人心救済というものも検討しました。これはケアや人心救済というものは、どんな内容で構成されているのを検討してきた、ということなんです。例えば、ケアというのは誰々さんはいった、人心救済というのは廣池博士はこう言った、ということ、そういった項目、コンテンツを検討してきました。さらにその上で、私が特にここで、この研究会で取り上げていきたいなと思っておりますことは、「能力」レベルについてです。じゃあ、「どのように関わるのか」ということについて、検討

をしていきたいなということなんです。どのように関わるのかを考えるということで、ケアとモラロジーを一緒に考えることができるようになります。言い換えると、「方法論」をモラロジーの中に実装していく、組み込んでいくということですね。方法論というのは単なる方法の羅列ではなく、背景となる思想・パラダイムから検討して、状況に合わせた方法の選択や、その評価と改善までを含みます。したがって、ケアとモラロジーを一緒に考えることで、モラロジーは「方法論」を議論できるようなことになるというわけです。この点が、私が申し上げている「視野が広がる」ことの意味で、特に期待しているところになるわけです。

### 三、能力レベルの議論とは

ではその能力レベルの議論というのは、具体的にはどういうことかということに、もう少し触れていきます。

#### (1) 「真理」の探求から「現実」の問題へ、視点の移行

まず能力レベルの議論は、「真理の探求」から「現実の問題」に視点が移行します。ですから、現実の問題として、どのようにケアするのかというところに焦点を当てた議論が可能になるということです。確かに、普遍的な真理の存在を探究する研究は、これまでここでやってきていることです。例えば、神と

か、伝統なんて話も、さきほどありましたが「存在」とはどのようなものかを研究する領域も確かにあります。もう一方で、この「文脈的、個別的」な「現実」の、「今」の「行為」を探し求めるといふ領域もありまして、それがケアとモラロジーを一緒に考えていくことで開けてくる地平といえますか、視野が広がるということになるんだと思います。この文脈的、あるいは個別的な現実の行為ですね。「それをどうするの？」ということを考えることができるというのが、このケアとモラロジーを一緒に考えることの大きな特徴になるかなと思ってるわけです。

### (2) 人に優しい道徳を身につける機会が生まれる

そのことによつて、人に優しい道徳を身につける機会が生まれるのではないかと、ということを上げたかったわけですね。そうじゃないのが冷たいっていうふうにいふわけではなく、むしろ、ケアとモラロジーの方法論を検討することで人に優しい道徳を身につける機会が生まれるということのも特徴の一つかなと思います。

ここでちょっと聞き慣れない言葉ですが、直線的因果律と円環的因果律を使い分ける能力を身につけるといふことを申し上げたいと思います。

これは家族心理学から持ってきた言葉なんです、直線的因

果律っていうのは、何か問題が起きたときに、加害者の心遣いに問題があると考えることを指しています。従つて、その心遣いが改まったら問題は解決すると考えますから、問題の原因は心遣いでそれが改まれば解決すると、直線的に結びつけやすくなりますよね。そうすると心遣いと結果が直線的に結びついてしまいます。

円環的因果律といいますのは、「状況のせい」にするということですね。その人がその状況に置かれた。つまり、その人がどんな状況に置かれていたのかでそのような行為、行動を行ったのかというふうには、状況に視点を当てていくことを指します。このように心遣いから状況に視点を変化させることによつて、人に優しい道徳をできるようになるわけなんです。

これはどっちがいいってわけではないんですけども、この直線的因果律、つまり、その人の心遣いが問題だ、だからその心遣いを改めれば解決するはずだ、と直線的に考えるものと、円環的に、つまり、その人がどんな状況に置かれたからそんなことをしてしまったんだらうというふうに見えることを、状況に合わせて使い分ける能力を身につける必要があるということではあります。その領域がケアとモラロジーを一緒に考えることで、やはり開けてくる地平だと思つていいです。

### (3) モラロジーを学ぶ人のケアへ

これも私がこの会でやっていきたいなと思っていることなんですけども、具体的には「社会的役割と自己との対話で起きる心理的な葛藤を受け入れやすい形で言語化し、共に生きる方法を検討する」ということです。ちょっと分かりにくいかもしれませんが。説明します。

私たちには社会的な役割があります。複数あり、様々です。この複数ある社会的役割と、私個人、自己というものとの間には、対話が起きているわけです。この対話は、時には心理的な葛藤というものを生み出します。多くの場合、この社会的な役割を優先して、自分の声を我慢する、これを道徳だと考えがちですね、普通道徳の世界では。ところが、最高道徳はそういうところ目指してないわけですよ。お互いにそれを受け入れやすい形で考えていく。単に自己反省して自分の中でもややとやるだけではなくて、言葉に出してみても、言語化して、そしてその上で社会的役割と自分が共に生きる方法を検討していくことができるようになる。これを、「モラロジ」を学ぶ人の「ケア」という文脈の中でやっていきたい。

私はこれを「意味づくりの場を設ける」というふうな言い方でお伝えしているわけです。家庭教育課のファミリーサポート・カレッジのほうで私のクラスを取っていただいている方は、この意味づくりの場をどのように設けていくことができるかという具体的な方法を、一緒に考えて、取り組んでいるとい

うことになります。

#### 四、おわりに——ケアとモラロジの方法論（身につけたい四つの力）

さて、ケアとモラロジを、一緒に考えることで視野が広がるんだということを申し上げてきました。そこで、次は私たちが身につけたい四つの力について触れていこうと思います。先ほどのご質問にもありましたが、プロのレベルから学ぶことがある、というお話です。ケアにはプロがいますが、モラロジにはプロはいませんね。プロのレベルでケアをする人たちからモラロジはどのようなことを学ぶことができるのでしょうか。国家資格のレベルで人のケアをするには、国が定めた水準を満たすことが求められます。その水準の一つに、この四つの力というものがあります。

一つ目は基本的な態度。もう一つは、関係構築力。三つ目が問題把握力。そして四つ目に具体的展開力ということになります。

ややもすると、ケアあるいはモラロジを学ぶ人が実行に移す場合に、この基本的態度の一番で止まっている場合があるんですよ。どのようにあるべきかということを考えて、概念や内容レベルで考えるだけで終わってしまう人ですね。そういう人は、二番目の関係構築の練習ができていないために、ミスコミ

ユニケーションが起こって、言いたいことが伝わらなかったり、相手の言いたいことを受け取れなかったりすることがおきます。また、関係構築で課題を抱えている人は、たとえば、傾聴が大事だと考えて、ただ黙って話を聞いているだけの人もいます。それでは、話し手は自分の話がきちんと伝わっているかは分かりませんね。あるいは、問題把握力の練習をしていない人は、相手が問題だと言っていることは何であるか、そしてそれを聞いた私は相手の問題は何であると把握したかということをごちゃ混ぜにしています。ここを分ける練習が必要だったりますね。それは問題把握力の練習です。

ここまで、基本的態度、関係構築力、問題把握についてお話してきました。さらに、私たちが人をケアするには具体的な展開力も求められます。具体的な展開力とは、優先順位をつけて、どこから取り組んでいくかということと一緒に考えていく能力のことです。これらの能力は、ケアとモラロジーの方法論を検討する中で一緒に取り組んでいきたいなと思っています。

ここまで私からの「招待状」ということでお話させていただきました。

最後にこれは余談になりますけれども、ある研究会で、私がこのようなお話をした時に、こんなことを言われたんですね。モラロジアン（モラロジー）の家庭では、家の問題が問題だということを考えていて、このモラロジーにつながっている家庭が多いのではな

いかと。そのことに対して、私たちはどのように取り組んでいくべきかと、そのことについて考えていく必要があるよねって、こんな話だったんですね。そのことに対する私の答えなんですけれども、「家の問題が問題だと考えることが問題だということに気付いて、そのことをケアしていきたい」ということです。このこともまた私がケアとモラロジーの研究会で皆様と一緒に取り組んでいきたい内容の一つです。以上で終わります。

## 【シンポジウム報告②】

### 高齢者介護から考えるケア

中地 孝博（麗しの杜館長）

はじめに

皆さん、こんにちは。財団が運営する高齢者介護事業所、麗しの杜の館長をしております中地と申します。現在、私どもの高齢者向け住宅には、九十数名の高齢者の方が入居をされており、その他に地域から百名以上の方がデイサービスや訪問介護のサービスを利用されておりますので、ケアという言葉は日常的な用語として使われております。また、介護に携わる人のことをケアラーとかケアワーカーというように、ケアという言葉はとて身近な言葉でもあります。しかしながら、ケアとは何かと問われますと、時にはサービス内容のことであったり、法律や制度のことであったり、あるいは心づかいの問題であったりと、ケアという言葉が使われる文脈によって意味が変わってまいります。

ただ、私としましては、このケアという掴みどころのない概

念の中に、モラロジーに通底する道徳的な価値観があつて、それがこれからの地域共生社会に非常に重要な意味を持っていると感じている一人であります。そこで今回は、高齢者介護の現場に携わる者として、高齢者福祉の視点から、ケアについて考えてまいりたいと思っておりますので、どうぞよろしく願ひいたします。

#### 一、ケアの利他性

まず初めに、皆さんは高齢者介護というものに対して、どのようなイメージをお持ちでしょうか。例えば認知症高齢者の身の回りのお世話をしたり、寝たきりの方の身体介助をしたりとか、多くの方はそういったイメージをお持ちではないでしょうか。「介護実践」という意味においては、おおむねそのとおりですが、実は今から二十年ほど前に、福祉全体に関わる基本的な考え方が、国の政策によって大きく方向転換するという出来事がありました。当然ケアの在り方も、これに大きな影響を受けています。

そもそも日本の戦後の福祉政策はGHQの要請によってスタートしたものではありませんが、その所期の目的は、生活困窮者を国が保護・救済をするというものでした。その後、時代とともにケアの質は向上していきませんが、基本的な考え方は一貫して社会的弱者、つまり障害者、高齢者、被虐待児などを困難な

環境から救い出して、施設で保護をするという「保護思想」に基づくものでした。こうした「ケアされる人を弱い存在」と捉える考え方の、いったいどこに問題があったかという点で、その主体性への配慮が不十分であったという点です。例えば、思いやりや、いたわりは大切な徳目ではありますが、相手が何を望んでいるのか、どうありたいのかという主体性を欠いてしまうと、単なるおせっかひになりかねないということと同じであると思います。こうした反省から、社会福祉基礎構造改革以降、ケアされる人の捉え方が、「弱い存在」から「自己の生活の主体」というように置き換えられるようになりました。例えば、認知症の方にとっては、自分で物事を判断したり、選択したりするということは、確かに難しいことかもしれません。しかし、それでも自分らしい生活の在り方、望ましい生き方というものを必ず持っているんだと、そういう信念を持って私たちは接し、そうした方々の沈黙のニーズ、声なき声を聞き取るということも、今日の介護職には求められております。しかし一方で、制度が変わったからといって、いきなり人の意識が変わるものではありませんので、現実的にはいろんな課題があることも事実です。特に問題となるのが、相手に感情移入しすぎるといようなケースがあります。主体性を尊重するということは、相手の感情に同化するというものではありませんので、特にこの点は注意したいところです。結局、相手の主体性を尊重

するということは、自己の主体性も尊重するということであるうと思えます。

## 二、サービスとケアの境界線

また、ケアされる人を自己の生活の主体として接すること、そして利用者主体を貫くということを困難にする背景の一つには、私たち介護職と利用者との特殊な関係性にもあります。家族によるケアが血縁関係を基本とした無償のケアであることに對し、介護職によるケアは利用者の「自立支援」という目的のための利用契約に基づく関係です。ですから介護実践においては、双方の関係は、初めましてから始まる関係、つまり人間関係が全く構築されていない状態からスタートします。

こうした特殊な関係性において、私たちが提供するサービスとケアとの境界線は一体どこにあるのか、ということについて考えてみたいと思えます。この点に関して、教育学者の矢野智司先生は、こう述べています。「ケアにおいて貨幣に還元できないものとは一体何だろうかという問いには、反対に看護や介護といったケアがなぜ報酬の対象になるのかという問いから問い直されるべきだろう。〈中略〉答えは極めて簡単だ。冒頭でケアとして取り上げた教育、介護、看護、医療は、それ自体はケアではないからだ。それらは固有の知識と理論に基づいてなされる仕事である。仕事には見合った報酬があるのは当然であ

る。しかし、ケアそのものを仕事とする人はいない。ケアを専門とするプロなどいない。」

この文章の中でケアそのものを仕事とする人はいない、ケアを専門とするプロなどいないといった主張は、一見、職業的ケアの否定のように聞こえます。それでは、ケアにおいて貨幣に還元できないものとは何なのかという問いに、矢野先生は「善き隣人として時間を与える」と位置づけています。ここでいう「時間を与える」とは何かというと、例えばサービス提供時間のような「物理的な時間」ではなく、私たち介護職が自我を離れ、利用者さんに心を注ぎ込んでいるような「心理的な時間」を指しているのではないかと考えます。といいますのも、実はこうした精神状態は決して特殊なものではなくて、介護現場において、高齢者の皆さんと関わるなかで、私たちが度々感じる感覚であるからです。それは介護職が特別な存在という意味ではなく、おそらく困難な状況にあっても、自分らしく生きようとして頑張っている高齢者の皆さんから、自然と引き出される感覚ではないか思います。

こうした感覚について、ミルトン・メイヤロフは『ケアの本質』の中で、次のように述べています。「私は他者を自分自身の延長と感じ考える。また、独立したものとして、成長する欲求を持っているものとして感じ考える。さらに私は、他者の発展が自分の幸福感と結びついていると感じつつ考える。そして

「私自身が他者の成長のために必要とされていることを感じると。私は他者の成長が持つ方向に導かれて、肯定的に、そして他者の必要に応じて専心的に応答する。」(二六頁)

この文章の中で、メイヤロフが度々、「感じる」という言葉を使っているのは、それが相手から自然と引き出される感覚であって、ケアが決して一方的なものではないということを描いているのではないでしょうか。

### 三、ケアの循環

さて、麗しの杜にも少し触れたいと思います。麗しの杜の開設のコンセプトは「二十一世紀の親孝行を提唱する」というものでした。これは現在でも私たちが最も大切にしている理念の一つでもあります。そこで最後に、「親孝行」というケアについて、考えてみたいと思います。

介護保険制度が始まって二十年が経ち、社会に介護サービスが充実してきたにもかかわらず、現在でも介護サービスを利用することに後ろめたさや心苦しさを感じるご家族は少なからずいらっしゃると思います。しかし家庭と仕事、あるいは子育てなどに加えて、親を家庭で介護をするということは大きな負担になることがあります。こうした負担感を感じながら親の介護をするということが、本当に親孝行なのかと思うときがあります。私はよく、入居される方のご家族に「介護職ができることは、ど

うぞ私たちに安心して任せてください、その代わり、例えば週末に家族で食事に出掛けるとか、お孫さんを連れてくるとか、そうした家族にしかできないことをお願いします」というようにお伝えします。こうした家族にしかできない孝行とは何かというところ、つまり孝行の「形」ではなく「精神」について考えることは、とても大切なことだと思います。

また、精神という意味においては、私たち介護職も、高齢者のケアを通じて孝行の実践をしているのではないかと最近思うようになりました。といいますのも、私どもの介護職員に、介護の仕事を選んだきっかけを尋ねると、子どもの頃におじいちゃん、おばあちゃんに可愛いがつてもらったという答えがとても多く、そうした思いが、時間を超えて介護という形で社会に還元されているのではないか、ということに気づいたからです。

廣池博士が、「自分の親に孝行する精神を移して、これを自分の生存し発達する全ての原因に対して、これを親として孝行を尽くすというようになって、ここに初めて「孝は百行の基」ということになるのであります」（『道徳科学の論文』三冊目、七八頁）と述べられているように、例え血縁関係がなくても孝行は実践できるものだと思います。こうした非対称的な関係性のみならず、介護職がケアを通じて恩恵を社会に還元しているのであれば、これも現代的な親孝行の実践と言えるのではないでしょう。

うか。

もちろん最後まで親の面倒を見たいという精神はとても大切なことですが、今の時代の孝行の形は、もっと多様性があっていいのではないかと思いますので、介護で悩んでらっしゃる方の参考になればと思います、最後にお話をさせていただきました。

以上で私の発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

## 【シンポジウム報告③】

## モラロジーとケア

—モラロジーとケアに関する自分の中の違和感を整理するために—

宗 中正（道徳科学研究所副所長）

はじめに

皆さん、こんにちは。今日は、このような形で勉強会を一緒にさせていただいて、ありがとうございます。先ほど宮下さんから全体的なお話がありました。その後、木下さんからは能力という側面から、また中地さんからは現場の立場をもとにお話がありました。

私自身は、「モラロジーをどう学ぶか」という視点をもって長くやってきたように思います。大学院では臨床心理学を専攻しましたが、臨床心理学は、カウンセリングやケアと深く関わる領域ですので、そういう視点を含めて、「モラロジーとケア」について考えていきたいと思っています。

「モラロジーとケアに関する自分の中の違和感を整理するために」という副題をつけました。三年間、共同研究を通して多くのことを学びましたが、話し合いの中で違和感を覚えること

もありました。そこで、ここでは、「私が感じた違和感は何だったのか」を出発点に、「モラロジーとケア」について考えてみたいと思います。

私の印象では、今回の共同研究は、「ケアの視点から現在のモラロジーの活動や考え方の課題や問題を補う」という面が強かったように思います。「補う」という視点は、モラロジーの課題や今後の発展を考える上で必要だと思いますが、一方で、そこにはケアというものが無条件によいものであるように捉えられているような印象があり、私はそこに違和感を覚えたのだらうと思います。「ケアとモラロジー」というテーマを考えるには、モラロジーの課題を考えるだけでなく、ケアの課題についても考える必要がある。一方でモラロジーにはケアという視点を補うものがあるかもしれない。このように、両方の良さと課題を併せて考えていくことが必要ではないかと思っています。

もう一つは、モラロジーというものを対象化して、これは「いい」とか「悪い」とか、そういう判断をする見方についての違和感です。そのような判断は、ある意味では科学的というか、客観的、論理的な視点で、研究としては当然のことかもしれませんが、心づかいや実践の側面を考えると、それだけでは一面的なのではないか、ということですね。先ほどの「家族が問題である」と考えることが問題だ」という木下さんの発言とも関係するかもしれません。そのあたりにも少し触れられ

ばと思います。

### 一、モラロジーの枠組みとしての「ケア」

これまでの具体的な問題から視点を移して、少し全体的な視点からお話しできればと思います。先ほどお話ししたような違和感を覚えながら、「ケアとは何か」についてしばらく考えてきましたが、結論として、モラロジーにおけるケアとは、広く考えれば、「宇宙の働きのケア」ではないか、というところに至りました。それが一番びつたりするように思います。

「宇宙の働きをケアする」というと、ちよつと不遜な物言いのようですが、私たちは「宇宙の働きに生かされている」、「つまり「宇宙の働きにケアされている」存在であると同時に、廣池千九郎博士が「天功を助ける」ということばで示されたように、「宇宙の働きを助ける」という視点に立つことが重要ではないかと思えます。最高道徳の基本は「宇宙自然の法則に従う」ことですので、宇宙自然の法則に真に従う道は、「天功を助ける」すなわち「宇宙の働きを助ける（ケアする）」こととであり、聖人は自らそういう生き方をしようとされた、その精神が慈悲である、というところに、モラロジーにおけるケアの本質があるのではないかと思います。

今は宇宙の働きの視点から考えましたけれども、人間の側から、人間の歴史の側から考えてみたいと思います。この宇宙が

生まれ、宇宙の働きの中に生命が生まれ、環境への適応による自己保存と発達を繰り返し、その過程で人間が生まれた。人間もまた、自己保存と発達を繰り返し、その過程で高度な精神を発達させ、集団生活の中で規範や道徳を発達させた。その規範や道徳も徐々に発達し、いよいよ「慈悲やケアの精神によって人間を真に尊重することが、人間が自己を保存し、環境に適応する最善の方法になるかもしれない」というところまで来つつある。しかしそれはまだ最近のことで、二千年ほど前に、ようやく聖人といわれる人たちがそのさきがけとなった。現在は、聖人が示したこの画期的な自己保存と適応の方法を私たちが受け継ぎ、人類に共通のものとすることができるかどうか、という課題に取り組んでいる。このように見ると、なぜ今「ケア」や「慈悲」が必要とされているかが分かりやすいのではないかと思います。

このように宇宙の起源にさかのぼって考えると、「宇宙の働きを助ける」ということと「人間の尊重」ということが、「自己保存と適応の最善の方法」という視点によってつながってきます。そして、「宇宙の働きを助ける」ことと「人間の尊重」の相即不離の一体の関係が見えてきます。このような考え方によって、私たちが、日常の生活において、「宇宙の働き」と「人間の尊重」を一体のものとして考えられるようになることが大切ではないかと感じています。

モラロジー創建五〇年の記念の年に、私の父が「聖人の伝統」という講演を行い、その講演録が『モラロジー研究』に載っているのですが、その中に、次の一節があります。

道徳の立場から申しますと、人の生命は最も大切なものでありますが、その真の価値は品性にあるのです。人生の法則は、品性の完成が根本であって、生活の資は、これによっておのずから生ずるのです。

モラロジーは、もちろん、生命を重んじ、人生を中心に考えます。しかし、人間は自然の部分であり、神の支配するところなのです。人生だけが大切なのではなく、あらゆる現象の秩序ある均衡が大切です。人間の生存と発達と、したがってその品性とは、天地自然の法則にしたがうところに価値があるのです。（宗武志「聖人の伝統」『モラロジー研究』四号、一九七七年）

人間の生命を重んじ、人生を中心に考えるが、その人間も自然の一部であって、神（宇宙の働き）に支配されている。だから、人生だけではなく、あらゆる現象の均衡が大切である。宇宙の働きに従うと同時に、宇宙のあらゆる現象の均衡を尊重し大切にす。これが最高道徳実行の本質であり、廣池博士は、このことを、「天功を助ける」ということばで表現されたのだ

と思います。

## 二、モラロジーの目的・内容と「ケア」

真に「宇宙の働きに従う」道が「宇宙の働きをケアする」とことであれば、そのケアの具体的目的は、モラロジーの目的である「人間の生存・発達・安心・幸福の実現すなわち人類の最高文化の実現」（『道徳科学の論文』第二緒言第五条、①序、一二〇頁）であり、それは「人心の最高道徳的開発もしくは救済により個人及び人類社会の進化を完成」（同）することによって実現する、ということになります。

急速に発達し変化する社会において、私たちは「個人と社会の調和」、「人間と物質の調和」、「精神と形式の調和」の問題など、多くの課題に直面しています。廣池博士は、「物質を大事にすることで人間をないがしろにしてはいけない」、あるいは「形式は大事だが、形式によって精神が失われてはいけない」ということを繰り返しておっしゃっています。最高道徳の実行や人心の開発救済を「宇宙の働きのケア」という大きな視点から見ることは、これらの問題を考える上でも有効なのではないかと思えます。

最高道徳の諸原理に示されている内容についても、例えば、  
 ①「公正さと思いやりの調和と一体性の必要」（正義と慈悲）、  
 ②「人類に現在の権利を齎した恩人への感謝と未来の人類に対

する使命」(義務の先行)、③「宇宙の働きと人間の精神の調和の必要―無私、大我、相互扶助、畏敬、慈悲」(自我没却)、④「人類の生存・発達・安心・平和・幸福をもたらした恩人の系列への感謝と報恩の必要」(伝統尊重) など、「宇宙の働きをケアする上での必要事項や留意点」として考えるとわかりやすいのではないかと思います。今回の中心的内容である、⑤「人心の開発救済」についても、「人類が宇宙の働きにかなう生き方を身につけ、幸福を増進するための人間同士の関わり」として考えることで、その本質を把握することができるかもしれません。

このように大きな視点から見るとは、抽象的になる面もありますが、最高道徳の原理を持つ本来の意味や全体像、目的などがかえって具体的に見えてきて、それぞれの原理のつながりについても「ああ、そういうことか」と腑に落ちるよさがあるように思います。

今回は、『道徳科学の論文』第二巻から、ケアに関する「格言」を取り上げようと思ったのですが、挙げてみると、廣池博士による格言は、すべてが「ケアの留意点」だなど思えてきて、途中であきらめました(笑)。多くの格言は、日常生活に役立つように平易に、具体的に書いてありますが、「宇宙の働きのケア」の留意点という視点から見ると、単なる人間同士の関係における尊重ということを超えて、すべての格言が、宇宙

の働きに適うようになるための指針であり、そのために本来の意味で人間を尊重できるようにするためのご注意だなどと思います。このように「宇宙の働きのケア」のような大きな視点から見ると、最高道徳の格言の理解を深めることができるのではないかと思います。

### 三、人間の尊重としての「ケア」を考える

ところで、「宇宙の働きをケアする」ということは、私たちの実生活においては、先ほどの中地さんの発表にもあったように、「人間をケアする」「人間を尊重する」ということが基本となりますので、「宇宙の働きのケア」と「人間のケア」「人間の尊重」を併せて考える上で参考になると思うことを三点挙げておきたいと思います。

ご紹介するのは、私が上智大学の大学院でお世話になった霜山徳爾先生(一九一九―二〇〇九)のことばです。霜山先生は、フランクルの『夜と霧』を邦訳された方で、ご退職までの最後の数年、心理療法の本質や留意点について講義してくださいました。毎回、講義がとても心に染みてきて、本当にこれは大事なことだな、と思いながら聴いていました。ご紹介する三つの資料は、その講義の内容をまとめた著書『素足の心理療法』(みすず書房、一九八九年)からのものです。

## (1) 生命への畏敬

一つ目は「生命への畏敬」ということです。少し長いですが、読んでおきたいと思います。

現代の技術連関と、科学性の追求のみを最上の目的とする文明のなかでは、畏敬などというものは恐ろしく時代おくれで、古風かつ陳腐なものの印象を与える。しかし生命の畏敬を忘れたことが、いかにしばしば人間や他の生物と生態系を危うくしているかという事実を無視することは何人もできないであろう。しかし畏敬は若い臨床家にとつては陳旧で、数量化できず、これという目に見える利益ももたらさず、ただ行動の自由を制限するだけの規範のように思われ、治療技術の進歩に何ら役立たないとさえ考えられている。しかし心理療法の進展は、理論的に見ると一見計画的にうまくいったように見えても、臨床の実際から見れば、あたかも自由に将棋をさすような、何よりもまず相手の出方に応ずる、患者との動的なかわりにおける、偶然的に見えるものの無数の連鎖から生じるものである。そしてその進展が可能になるためには、患者が一つの独自の世界であり、山や海や風や星々、それに何よりも草木虫魚の「生きられた」空間のなかにある、何ものにも代えがたいものとして、それに根源的信頼をよせることである。

そしてそれを前提として畏敬が生れる。畏敬は欺かれることがあるかもしれないが、買収されることはなく、どんな批判に対しても眼をつぶらない。畏敬は人間の厳然たる限界を確信するところに基づく。この限界に到達して、残照の地平から別なものが視野にあらわれる時、畏敬の念が生じてくる。患者もそのなかに入る。生の豊かな織物は不可侵なのである。(『素足の心理療法』五一〜五二頁)

ここには「生命への畏敬」というものは時代遅れで、あまり治療に役立たないと思っている臨床家もあるけれども、心理療法の進展は、「こうすればこうなる」というように理論どおりに進むものではなくて、人間と人間との自発的な相互のかわりの中で生まれ、進んでいくものであることが述べられています。

また、人間が宇宙の現象の一つである人間が、何ものにも代えがたい唯一の独自の存在であることを理解し、それに根源的信頼を寄せることで畏敬が生まれること、こうして生まれた畏敬というものは、欺かれることはあっても買収されることはなく、どんな批判に対しても目をつぶらない、人間に対する深い信頼に基づくものであることが述べられています。同時に、相手に対する畏敬の念は、人間がその限界を確信し、限界に到達したときに生じるものである、ということも、最高道徳の精神

の消極性（『道徳科学の論文』第八冊、二五二頁など）を考える上でも重要なのではないかと思います。

(2) 素足であること

二つ目は、「素足であること」です。

ここまで述べてきたことによって、何ゆえに本稿が「素足の心理療法」と名づけられたかを理解して頂ければ幸せである。心理療法にとっては素足性 (Bartlosigkeit) ということが基本的に重要である。素足とは文字通り「はだし」ということであり、跣足のことである。心理療法の歴史を顧みると、始めのうちこそ患者があつて理論が生まれできた素足の時代があつたようであるが、次第に大ていは誰でも、まず自分の気に入った理論という靴をはいて患者を診るようになってきた。靴をはくのは自分の足を保護したり、外見をよくしたりするのには、たしかに役に立つかもしれない。しかし言葉通りの隔靴搔痒という現象もすべての心理療法の各流派について出現してきたのも事実である。大地に、患者に、そして患者を生んだ文化に、素朴にしつかりと、はだしで立つことは、何か土くさい、ローカルなこととして考えられるようになってきた。しかし心理療法というものは、もともとローカルなものとして始まっ

たのである。（中略）もとより靴をはくことを悪いといっているのではない。現代の生活は（心理療法は）靴なしでは確かにすまされない。しかし恣意的に靴を選ぶことは許されないし、ましてや足を靴に合わさず、ジャルゴンを使って靴を足に無理に合わす（心理療法では信ぜられないことだが、よく行なわれる）のは論外である。（同、三三三〜三四頁）

当初は大地や、患者や、その土地の文化とともにあつた心理療法は、いろいろと手探りで試行錯誤を重ねて、だんだんと理論が出てきたわけですけども、後から心理療法を学ぶ人たちは、最初から自分が気に入った理論という靴を履いて患者を診るようになり、自分の靴に患者の足を無理やり合わせようとする、つまり自分の理論に患者の症状を当てはめようとしてしまう、ということなんです。靴（理論）は自分の足を守ったり外見をよくしたりするにはよいけれども、はだしということを忘れてはいけません。ジャルゴンというのは特殊な職業の専門語のことですが、診断や治療に便利である一方、一人一人の症状や人間の独自性を度外視してしまうことにもつながります。

モラロジーにおいても、新たな術語や、モラロジーの体系を前提とした用語や概念を使うことが多いですが、そのどれもが人類の安心・平和・幸福を願って生まれてきたものですので、

用語や概念に人を当てはめるのではなく、一人ひとりケアし、尊重するために役立つ態度が必要ではないかと思いません。

### (3) お大切

最後は、「お大切」ということです。

キリスト教が本邦に入ってきた時、聖書や祈禱書に「愛」という言葉を「お大切」と訳しているのはすぐれた英知である。人間にも自然にも「お大切」である時、始めて信頼や治療が可能になるのである。(同、三六頁)

これは、先ほどの「素足であること」の説明の続きにある言葉なのですが、この一節を読んだ時、私には言葉にならない深い感動がありました。今でもその感動がどこから来たのかを考えています。「愛」や「慈悲」というと精神的・概念的だけでも、「お大切」というと、精神と行為が一体となっているように感じたのでしょうか。あるいは、「愛する」というと、ある対象に対して自分の愛が向かっていくような印象があるけれども、「大切にする」というと、相手の存在全体を、そのままに尊重し、慈しむように感じたのでしょうか。真に人間を尊重するためには、相手だけでなく、相手を包む世界全体を含めて

「お大切」にする必要があると思ったのでしょうか。今考えれば、そこに「宇宙の働きのケア」と「人間の尊重」の一体性を感じたのかもしれない。そのことも、皆さんと一緒に考えていければと思います。

### 四、まとめ

最初にお話ししたように、ケアというものは、モラロジーや最高道徳に足りないものを補うというよりも、モラロジーによる慈悲の探究や実践を助けるものではないかと思えます。モラロジーの目的である「人間の安心・平和・幸福」の増進に具体的に取り組みでいく上で、ケアという視点は分かりやすく有効だと思えます。一方で、人間関係において、また社会的な活動として具体的にケアを行っていくとするとともに、「宇宙の働きをケアする」という視点は、ケアの本質や理念を理解し、ケアの具体的な取り組みのあり方を考える上で有効なのではないかと思えます。人間の尊重や人類の幸福の増進を目指して、ケアとモラロジーとの対話を進めていければと思います。ありがとうございました。

## 【シンポジウム報告④】

## モラロジーと公共性

竹内 啓二（道徳科学研究所客員教授）

## はじめに

皆さん、こんにちは。最後になりました。お疲れのところかとは思いますが、あと十五分ですので、よろしくお願ひいたします。私は千葉県NPO法人の千葉県東葛地区・生と死を考える会の理事長を務めさせております。それから、過去にワシントンDCにあるジョージタウン大学のケネディ倫理研究所で終末期医療のこと、ケアの倫理について一年間研究させていただきました。自分の研究テーマの中に、ケアの倫理とか、ナラティブ・アプローチ、スピリチュアル・ケアというものがあり、これらもケアに関わります。

生と死を考える会が一九九三年発足しまして、それから事務局長とか副理事長を務めて、平成三十一年の三月から理事長を務めております。私は麗澤高校、麗澤大学で、全寮制の時代に寮生活を送りまして、現在六十八歳であります。大学院の修士

課程で地域研究を専門として、近代インド思想を研究し、インドに三年間留学し、タゴールの創立した大学で学んできました。現在、妻と二人で光ヶ丘に暮らしております。

## 一、言いたいことの要点

それで、言いたいことの要点ですけれども、モラロジーは公共的ということをも、まず言いたいと思います。廣池千九郎先生は、モラロジーは公共性を持つもの、公共に関わっていくものとして構想して展開しようとしたということ。それをわれわれも引き継いで展開していきたいということを言いたいですね。まずは、そのためには地域に目を向けると。地域のため、社会のため、さらに世界のために活動している団体に関心を持つということ。できればその活動に参加してみるということが大事じゃないかなということですね。

それで二番目に言いたいことは、「かかわり」と「つながり」のバランスということ。ケアは親しい人、家族の間。これを親密圏と言います。親密な間柄の中で行われるケア。それを「かかわり」という言葉で表現されているのは、水野治太郎先生です。その「かかわり」は大変重要で、親密な関係のなかでのケアの実践は難しいですね。皆さんも家庭の中で奥さん、子どもさんとの関係、ケアとなるとなかなか実践は難しいと思いはないでしょうか。

そういった親密圏でのケアの実践における自分の心の修養とか、人格の向上、品性完成、品性向上にだけに関心を向けるだけでは不十分であると思います。ケアは地域社会、国、世界の国々との関係にまで広げて行われるもの。すなわち、それを水野先生は「つながり」という言葉でおっしゃっています。ですから、「かわり」と「つながり」のバランスというか、「つながり」を忘れないようにしたいと思ったわけです。

## 二、モラロジーは公共的

本論のところに入っていきます。モラロジーは公共的っていうところですが、廣池先生がモラルサイエンスというもの、モラロジーという言葉を作る前に、モラルサイエンスって言葉を使っておられたんですが、モラルサイエンスと公共性ということに関連して、廣池千九郎のモラルサイエンスには、公共性の課題意識が濃厚にあって、決して私的生活での議論にとどまっていないってことです。

これは水野先生の『経国済民』の学—日本のモラルサイエンス研究ノート』(二〇〇八年)という本の中で論じられています。それによると、「先の大戦前夜の時代状況の中で執筆されたために、内政・外交・経済不況の克服、移民問題、労使の対決回避の課題、国民教育の問題、平和教育の推進等、一切が公共世界のあり方を議論するものでした」ということなんです

ね。社会的といえますか、国家的道德としてのモラロジーであったわけです。

廣池先生の言葉にも「道德は社会的、国家的なもの。宗教の信仰は、ただ心の中の問題にて家庭的、個人的」であるというものがあります。「道德を行う基礎が知によるのみでは浅きゆえに、神の心を本となす。これ最高道德なり」と。これは『廣池千九郎語録』(二一頁)の中の言葉です。

ここからも見えるように、廣池のいう道德は、「社会公共的」性格を有する社会倫理、あるいは社会的作法とも言えるものであることは十分に理解できると思います」と、水野先生は述べています。

## 三、「かわり」と「つながり」のバランス

次に「かわり」と「つながり」のバランスということに関してです。ケアの他者重視の理論は、公共的な意味を暗示しているということですが、「ケア」というと、これまで他人をどのように援助するとか、介護するとかの技法が問われてきました。が、それでは、ケアの営みは、最終的には他者を支配する営みになってしまいませんか。「ケアの他者性重視の理論は、当然ながら、広々とした無数の未知の人々との出会いを予測する」という点で、まさしく公共的な意味を暗示していた」ということです(水野前掲書、一六二頁)。

「ケアという営みを公共性と関連させ、「かかわり」から「つながり」へと視点を開く。家族あるいは病院・福祉施設等、これまで社会からは閉ざされた親密圏でのケアに注目してきた我々自身が、自らの責任において、公共世界でのケア理論のさらなる発展に尽力したい」（水野前掲書、一八九〜一九〇頁）というのも水野先生の言葉ですが、公共性と関連させて、ケア理論も発展させていきたいということですね。それをわれわれも受け継いでいかなければならないとも思っております。

例えば、地域に関心を持つということが大事だということでは、前掲の水野先生の本の中でも、天皇后両陛下が各地を回られますことを取り上げられ、その時、必ず福祉施設、高齢者、幼児、それから肢体不自由者の施設を訪問されるわけですね（水野前掲書、一八八頁）。そのことをわれわれも模範として、「地域の公共性の意識を持つと、国家の課題も一層見えて」きます。地域には、幼児もいるし、高齢者もいるし、肢体不自由の方もいるということが見えてきます。そういう方に関心を持ちますと、国家の課題も一層見えてきます。また隣国の人々の暮らしも気になるし、また遠い国々の人々の飢えの問題も他人事として放置できなくなります。ということ、地域から、国際問題まで関心を持つことになります。広がっていくということですね。

私自身の実践は、「とうかつ・生と死を考える会」で、いろ

いろやっております。ご関心ある方はホームページに見ていただきますと、そこに詳しく載っております。様々な社会貢献活動をやっております。

最後にご紹介するのは、平和をつくる地道な活動をしている日本の団体です。「一般社団法人平和村ユナイテッド」という団体があります。つい最近知りました。今のアフガニスタンの問題に向き合って、平和をつくるという具体的な活動をしています。モラロジアンのをれわれは、人類の安心、平和、幸福の実現と言っていますけれども、このグループは、実際に具体的に平和をつくることにかかっているのです。戦闘で親を亡くした子どもたちをケアして、復讐の連鎖、暴力の連鎖を食い止めるようとしています。争いでは解決できない。対話だよっていうことを子どもたちに教えています。今はタリバンが支配して、まだ紛争は止まない。非常に大変なところですけども、こういう団体が活動しています。

#### 四、まとめ

廣池千九郎は、モラロジを、公共性を持つものとして構想しました。品性の高い個人がたくさん集まれば良い社会ができるから、個々人は品性向上に努めればよいということはいえませんが、しかし、良い社会をつくるためにどう考え、どう行動すれば良いのか。そもそも、どのような社会をつくらうと

しているのかといったことからアプローチすることも重要ではないだろうか。それは各人の行動や、考え方の公共性を考えるということにつながります。

子育てとか介護、家事など、主として女性が担ってきたケアを、家庭という親密な関係の間で行われてきたものですが、それは社会をどうするか、社会の制度や構想とも深く関わるものです。また地球上の国や人々が、情報や交通機関を通じ、ものすごくグローバルな世界になっている現代においては、ケアの公共性について考え、それに基づいて社会国家を構想し、実践していくことが大切であると。それは廣池先生が国家、社会をどうするのかという観点で、モラロジーを構想していたと考えるとき、ケアとモラロジーは公共性ということにおいてもつながっているとと言えます。以上で終わります。



